レムがゼロから始める異世界(日本)生活。(タイトルは仮)

桃梨 蜜柑@ILIM

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とうとうやってしまう…。

不定期投稿になるのはわかってる。

駄文だという事も理解している。

だがしかし！

レムりんが好きで好きでたまらないから仕方ない！

簡潔に言うと、この作品はレムりんとスバルが日本になぜか（スバルは戻って）来ちゃうスバレム作品！

作者はレムりんの笑顔の為ならいくらでも頑張ります！

そう勤勉に……。

「アナタ、勤勉デスね？」

目次

「にほん…？」 1
「おかえり」 5
「これがあいうえお…これで…れむ、ですね？」 13
「決めました！これにします！」 17
「それとも……レムにしますか？」 23
「おぉ…。凄いです！スバルくん！」 29
「……今はレムだけを見ててくださいよ。」 35
「…ベティーを置いて行かないで欲しかったかしら。」 39
「…スバルくんは鈍感すぎます。」 42

「にほん…？」

「ここから始めましょう。」
スバルくんに語りかけます。
この想いがスバルくんに届いて欲しくて。
「1から。」
涙が溢れ出します。
レムはスバルくんが幸せでいてくれればいいんです。
一緒に始めるんです。
だからレムは言い直したんです。
「いいえ。ゼロから！」

その瞬間、息が出来なくなる程に苦しくなって…。
スバルく…ん…。
目の前が真っ暗で。
スバルくんが見えなくて。
レムはどうしちゃったんでしょう。
スバルくんは…無事でしょうか…？

気が付くと夜で、後ろにはやけに明るい建物がありました。

「ここはどこでしょうか…。」
ぺたぺたと地面を触ります。
うーん…。知ってる地質ではないです。
あ、あれ…さっきまで一緒に居たスバルくんは!?
どこ？
スバルくんの匂いを辿ります。
「スバルくん!?」

匂いがかすかに動きます。
「れ…レム…？」
よかった…スバルくんは側にいた…。
「スバルくんスバルくんっ！無事でよかった！」
「お、おう…。うん。お互いに無事でよかったんだよな、うん！」
スバルくんの汗の量がいつもより多く感じます。
なにかあったんでしょうか。
「さ、さっきまで俺は異世界にいたんだよな…？」
「いせかいが何かはわかりませんが、スバルくんがそう思うのならそうだと思います。」
でも、どうしましょう。
後ろの建物には色々と書かれているのに、これっぽっちも何が書いてあるかがわかりません。
何語なんでしょうか…？
「ここって…日本だよな…？」
「にほん…？」
スバルくんはここがどこかわかっているのでしょうか！
さすがです！スバルくん！
「いやいや、何も解決してないのに異世界からの強制退去はないだろ!?」
「そ、そんなに取り乱してどうしたんですか!?スバルくん！
ほらしんこきゅーしんこきゅー！」
スバルくんにすーはーすーはーと呼吸をさせます。
リラックス効果があるので、スバルくんが落ち着く事を願います。
「レム、とりあえず付いてきてくれるか…？」
「スバルくんが望むなら喜んで！」
はぐれないようにとスバルくんが差し出した手を握り、レムは歩き出します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

え、えっと。
俺はこの風景を知っている。
後ろのコンビニで買い物をした後に、異世界に…エミリアたん達がいる世界に召喚されたもんな！
「も、戻ってきたのか…？レムを連れて？」
いやいや。
「じょ　うっ　だ　ん　じゃねーーーじゃ！」
「ひゃっ!?スバルくん、どうかなさいましたか!?」
「いや、なんでもないっすよ。」
いやいや、まだなんにも解決してないよな!?
さっき、レムが「ゼロから！」と言ってくれたから、俺は前に進もうって決意したところだったよな!?
「スバルくんスバルくん。今、レムはなんだか幸せです。」
「やっぱ、レムの笑顔は１００万ボルトの夜景に匹敵するぜ！いや、それ以上かなぁー!!」
「スバルくん、何か無理してますよ？大丈夫なんですか？スバルくんにとっては因縁の土地なんですか？」
レムさん、マジ天使。
「いや、大丈夫っていうか…。俺が生まれ育った場所だしな。」
「スバルくんの故郷なんですか!!」
レムが目を輝かせる。
俺が今向かっているのは愛しの我が家。
表札はちゃんと【菜月】だ。
「菜月家にとーちゃくっと。」
あ、レムの事をなんて紹介しよう。
それより、どれくらい時間経ってるんだ？
お母さんと父ちゃん…俺の事、忘れてないよな？
「スバルくんの…家ですか…？」
「そう！俺の家…だと思いたい。マジで。」

レムと少し話をしないとなぁ。

と、考えていたその時。

「あれ？今帰ってきたの？昴。」

おーまいごっど。

何を話すかも決まってねーよ！

「おかえり」

「昴…？どうしたの？」
お母さんが目の前にいる。
俺の家の前だし、遭遇の確率が高いのも理解はしている…！
してるんだけどさー。なんか、もうちょっと感動の再会っ！的なのないかな？そこんところ、どうよ、まいまざー。
いや、状況から単純に考えるとまさかとは思うけど…。
「お母さん、俺がコンビニに行ったのって何時？」
「昴が行った時間は知らないけど…でも、そんなに時間は過ぎてないわよ。」
「スバルくんのお母様ですか？」
「何この子、めっちゃ美人！え？まさか昴の彼女？お赤飯炊かなきゃ!?」
そんなに時間は経っていない、と。
てかお母さん、レムに今気づいたのか…。
「あ、え…えと、メイザース家当主に代わ……もごっ。」
「そういう堅苦しい挨拶はしなくていい！（小声）」
「え、で…でも！」「でもじゃなーい！」
ヤバい、お母さんが怪訝そうにこちらを見ている。
「あ、あははー。この子、厨二病ってやつでさー！」
「ちゅーにびょー？」
「あ、昴と似たような子なのね…（可哀想な子を見る目）」
いやいやその扱いはねーよ!?
「とにかく家入っていいかな？」
「そうねぇ、家の前で立ち話もアレだしねぇ。」
やっと家に入れる…。
お母さんが走ってリビングの方へ向かう。
「スバルくん、スバルくん、ここでは靴を脱ぐんですか？」
「おう、そうだよ。」
そういや、レムはメイド服のまんまだ。

端から見れば、美少女メイドを連れたドラ息子のお帰り？
「父ちゃんがどんな反応をするのやら…。」
「こんな反応だーーーーっ！このドラ息子めっ！こんにゃろこんにゃろっ！」
「ぐぇ!?」
不意うちでヘッドロックをかけられる。いてぇし、苦しい…父ちゃんからの愛情がミシミシ…つ、伝わってくるぜ。
「スバルくんに何をしてるんですか…？」
レムから伝わる殺気で、父ちゃんの力が緩む。
「このバカ息子！どんだけ心配させりゃ気がすむんだよ!!」
「す、すまねぇ。」
え、お母さんさっき、そんなに時間は経っていないって…。って、お母さん泣いてるし。
「昴、おかえり。」
「しかも帰ってきたかと思えば、メイドさん引き連れて帰ってくるし…本当に親不孝もんがぁっ！」
痛い痛いっ！
「スバルくん、ご両親を心配させるのはダメですよ？」
「そうだそうだ！お嬢ちゃん、もっと言ってやってくれよー！」
「本当にすみませんでした！もう苦しいからやめて!?」
やっと解放されたー。
「ごめんね、昴。本当はずっとずっと探していたのよ。
昴が居なくなってから1年と半年。」

1年と半年、その言葉を聞いて少し呆然とする。
そんなに時間は経っていたのか。

「昴、無事に帰ってきてくれてありがとう。」
お母さんの顔は少しやつれていた。父ちゃんなんか頬が少しこけて、目の下にはクマがある。
こんな両親の姿はみたことない。

「心配させて……本当にごめん。ごめん…なさい。」

気がつけば俺は泣いていた。

「本当にごめ…んっなさ…い。」

思いきり泣いてようやく落ち着いたころ、レムについて聞かれた。

「レムは…この子は…なんていうか。俺の事を大切に思ってくれてる子。く、詳しくはあんまり話せねぇ。

あ、でもすっげぇいい子なんだぜ！掃除洗濯はもちろん、ご飯もうめぇ！その…しばらくうちに置いてくれない？」

しかし、こんな説明で許す程甘くないよな…。

「レムちゃん…だっけ？」

「は、はい。レムですっ。」

お母さんはレムに話しかける。

「ずっと、昴と一緒に居てくれたの？」

「えと、最初はエミリア様が…倒れて運ばれてきたスバルくんをお屋敷に連れてきてくれて…そこから先はレムは一緒でした。

でも、スバルくんは……レムの大好きな…ひ、人…です。」

ちょい待って!?俺の両親の前でそんな事を言われるとさすがに不味いというかなんというか！

「ねぇお父さん、どうしましょう？私、息子より娘が欲しかったのよねぇ。」

「息子を前にしてなにその告白!?」

「昴がお世話になってたみたいだし、いいんじゃねーか？
ただし！行方不明になってから今までの昴について、おいおい聞かせてくれよな。レムりん。」
「レムりん呼びは俺が先だったからな!?」

いや、異世界の話とか無理だろおい。
「わ、わかりましたっ！よろしくお願いします。
え、えっと。」
「お母さんでも、菜穂子さんでもなんでもいいわよ。おすすめはお母さんね！」
「俺はお父さんでも賢一でも、なんならお兄ちゃんでもいいぞ！」
「ねぇ…お父さん…？」「父ちゃん、さすがにねぇわ。」
レムがくすっと笑う。
「わかりました！よろしくお願いします。お母さん、お父さん。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

明日、スバルくんのお母さんとお洋服を買いに行く事になりました。
今、レムはスバルくんのお部屋でスバルくんを待ってます。
お母さんと夕食の支度をしているそうです。
スバルくんは、ずっと私達のそばに居てくれて…ご両親の事も全然知りませんでした。
「姉様…。」
ここに来てから全く姉様の声も意識も伝わりません。

”ここ”は一体どこなんですか？
大気中のマナが少なくて魔法すらあまり使えない、ここはどこなん

ですか？
スバルくんに聞きたいけれど、聞けません。
聞く事がなんだか怖いです。
「お姉ちゃん……レムは、どうすればいいんでしょうか。」

＊＊＊＊＊＊＊＊
「レムは、両親が居ないんだ。あ、ラムっていう姉様がいるんだけど、得意料理はふかし芋！それにマヨネーズかけるとマジで旨い！」
お母さんが一生懸命料理を作ってる後ろで父ちゃんと話す。
「エミリアた……エミリアは素直で優しくて、可愛くてほおっておけなくて…。俺の超大切な人。」
「レムちゃんが恋人じゃないの!?」
父ちゃんから関節技を決められる。ギブギブっ！
「浮気か!?浮気か!?いきなりハーレムしてんのかよ　うらやましいな我が息子!!」
「マジでキツいからやめてね!?」
「えっと、マヨネーズ出しといてー。」
「そこで平然と要求できるお母さんさっすがー！」
冷蔵庫からそれぞれのマヨネーズを出す。
キャップ上にス、ナ、ケと書かれたマヨネーズ。
「レムちゃんの分はどうしましょう…？」
「レムには、マヨネーズ風呂で窒息させられかけた記憶があるが、まぁストックがあったよな？それ渡そうぜ。」
マヨネーズ風呂というワードに父ちゃんが眉を動かす。
「マヨネーズ風呂、あれは菜月家のロマンだ。
よくやった、レムりん」
「だからレムりん呼びは俺が先だったからな!?マイファザー！」
久しぶりの家族との会話。
気を張ってないと泣きそう。

多分、それはお母さんも父ちゃんも一緒で。

「スバルくん。ちょっといいですか？」

レムから呼ばれなかったら、また泣いていたのかな。

「じゃ、レムのとこに行ってくるわ。」

「スバルくん。重大な問題です。

全く文字が読めません。」

漫画を片手にレムが悲しそうな顔をする。

「よし夕飯終わったら文字の勉強！最初はひらがなから教えようか。」

「はいっ！スバルくん！」

夕飯として出されたのはグリンピース尽くしの緑の山でした。

おい、俺を殺す気か!?

「父ちゃん！息子の久しぶりの頼みなんだけどさぁ。」

「すまねぇ。俺は婆ちゃんからグリンピースだけは食うなと言われてんだ。」

「ちなみにお母さんもよ。」

そんな話初めて聞いたわ！

「スバルくん、好き嫌いはダメですよ？」

「そういうレムはグリンピース食えるのかよ！」

「食べれます（ドヤァ」

ドヤ顔で普通にグリンピースを食べてるレム。

「さて、レムのお手伝いはここまでです。かっこいいところを見せてください！」

「いや、絶対その台詞ここで使うところじゃないから！」

レムから応援されたところでグリンピースはマジで無理。

無理やり口に入れて飲み込んで

むせた

「グェッホゲホっ」
「丸呑みなんかするからよ？ほらお茶。」
グリンピースが気管に…。
「レムは信じています。スバルくんは好き嫌いなく食べれる人だって。」
レムのその言葉に父ちゃんが反応する。
「あー、俺もグリンピースっちゃおうかなぁ？」
「え？お父さん何を言ってるの？」
俺の皿からグリンピースを少し取って食べて

むせる

「グェッホゲホっ！」
お母さんから呆れた顔で見られる父ちゃんさすがだわ。
「マヨネーズ、やっぱりこの味だわ。」
俺は日本のマヨネーズを味わう。
レムも少し舐めてみて、
「ふむふむ。……で……すれば完璧でしょうか。
そしたらスバルくんも満足してくれて、撫で撫でしてくれる。と。」
「聞こえてるからね!?」
＊＊＊＊＊＊＊＊
「ごちそうさまでした。美味しかったです。」
スバルくんのお母さんのお料理は美味しくて、レムも頑張らなくては！と思います。
パジャマだけは持って来ていました。
それと鉄球さん。
スバルくんに何かあれば、なんとか応戦は出来そうです。よかった。

「レム、入っていい？」
鉄球さんを直して、パジャマをちゃんと着て言います。
「はい、大丈夫です。」
さぁ。スバルくんとの勉強を始めましょう。

「これがあいうえお…これで…れむ、ですね？」

「よう、レム。パジャマ持ってきてたんだな。」
「はい、スバルくん。」
　鉄球さんの事は、なんとなく隠しておかなきゃ…と思います。
「スバルくん。ひらがなを教えてくれるんですよね？」
「と、とりあえずさ。レム近い近い。」
　おっと。近付きすぎだったでしょうか…。
「ふぅ。最初はひらがなから教えるよ。
　ノートノート……お、沢山あるなぁ。」
　スバルくんがノートをレムに渡します。
【菜月昴】と書かれたノートです。
「スバルくん、スバルくん。これはなんと読むんですか？」
「あ、それがなつきすばるだよ。まぁ、それひらがなじゃねーけどな。」
　レムは覚えました。
　何も書かれていないノートにひたすらに菜月昴と書きます。
「レムさーん。ひらがなをまず覚えようね！？」
「はい！スバルくんの名前は覚えましたから。」
　スバルくんには姉様とレムでイ文字を教えていたのに、今は立場が逆なんて。
　思わずくすりと笑ってしまいます。
「ん？どうしたん？」
「いえ。こうして教えてもらってると……変な感じがするなぁと思ったんです。
　けーせーぎゃくてんって奴ですね。」
　あ　い　う…とひとつひとつ丁寧にスバルくんが書きます。
「これが、あ　でこれが　い　。」
　順番順番に教えてくれます。
　スバルくんの指がノートにすらすらと文字を紡いでいきます。

「わ　を　ん、これでひらがなは終了！濁点とかは使う時に教えるよ。」
「ばの書き方を教えてください！」
「ほいほい。」
　ば　と書いてもらいます。
　スバルくんのノートにひらがなを綴る指が止まりました。
　レムも頑張って書きます。
「わ　を　ん…最後に　ば　。スバルくん、どうでしょう！」
「おぉ、完璧じゃん。」
　スバルくん特製のひらがな表と照らし合わせながら文字を書きます。

「これがあいうえお…これで…れむ、ですね？」
「おぉ！覚えるのはっや!!さすがレムだな。」
　やっぱりスバルくんに褒めて貰えると嬉しいですね。
　撫でてもらえるともっと嬉しいです。
「ひらがなとカタカナは覚えるのは簡単だからさ。
　今日はひらがなだけにしとこう。
　俺…ねむい…ふわぁ……。」
　スバルくんに伝えたい言葉を覚えたてのひらがなでノートに書きます。
【れむはすばるくんをあいしています】
「レムさん、二人きりの状態でそれ言われるとさすがに恥ずかしいからね!?」
「レムはスバルくんに今伝えたい事を書いたまでです！」
　正直、この世界に不審感も不安感もありますが
　スバルくんの傍にレムが居られるのなら……レムは鬼しあわせです。
「んじゃ、おやすみ。レム。」
「おやすみなさい。スバルくん。
　あ……。」

スバルくんのお父さんとお母さんに来客用のお部屋とお布団をお借りしています。
でも、なんとなく…一人になるのが嫌だったからスバルくんに言います。
「スバルくん。今日だけ……一緒に寝てもいいですか?」
スバルくんから返事はありません。
そのかわり、すぅすぅと寝息が聞こえます。
「スバルくん。エミリア様。ごめんなさい。」
レムは卑怯なのかもしれません。
スバルくんのベッドに潜り込み、ぎゅっと抱きつきます。
目を閉じ、考えます。
これからどうなるのか。どうすれば姉様のところに戻れるか。
スバルくんの体温を感じながら、レムは眠ります。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

夜中、水が飲みたくて起きたらレムが俺に抱きついて寝ていた件。

え、嘘だろ。
レムさんにはお部屋あったはずだよね⁇
「すばりゅくんは……レムをあいすべきなんれしゅ……。」
俺がレムを離そうとしても離れません。どうしましょう。マジで。
ていうか寝言‼
水が飲みたい気持ちも吹き飛ぶわ。
どうしてくれよう。

確実に明日の朝は修羅場だぜ。
なにかいい技ねぇかなぁ。

「スバルくん……レムは愛しています……」
あー！
こういう時は……
エミリアたんが一人…エミリアたんが二人……
いや、レムの前でこれはちょっと……
あと、俺死にたくない。

パックが一匹…パックが二匹…パックが三匹……
エミリア達は大丈夫なんだろうか。
ペテルギウスの件……なんにも解決してねぇのに、これでいいのかよ。

俺は、
また逃げてしまったんだろうか。

結局、この後も俺は寝る事が出来なかった。

「決めました！これにします！」

スバルくんのお母さんとお洋服を買いに行く事になりました。
スバルくんはお留守番です。
なぜかというと、レムが朝起きたらスバルくんはぼろぼろになっていたのです。
スバルくんはお父さんに関節技をかけられてたらしいです。スバルくんのお母さんはあれはスキンシップだから大丈夫よ、と朗らかに言いますけど大丈夫なんでしょうか。
「レームちゃん。
レムちゃんはどんな服が好きなの？」
「特には……スバルくんが好みそうな格好はなんでしょうか。」
レムは今まで服装とか気にしてなかったものですから、いきなり好みとか言われても……スバルくんが好きそうな服ならいくらでも着ますけど。
「うーん、スバルなら……メイド服？」
「今までの服装にしましょう！」

ダメと言われて、お洋服を取り扱うお店に連れていかれます。し○むらです。
昨日の勉強のおかげでひらがなは読めます。
「うーん。レムちゃんはすらっとしてて、スタイルいいからなんでも似合いそう。」
色々なお洋服があります。
もてシャギー？なんですかそれ。
ふわふわしてて可愛いのですが、スバルくんは好みますかねぇ。
「レムちゃん、ちょっとこれとこれ着てみて？」
二枚のお洋服を渡されて、〝しちゃくしつ〟というところで服を着ます。
少し…胸元がキツいですね…。
試しにもう片方のワンピースを着てみます。

あ、とてもさらさらで着心地がいいです。
白いワンピース、これが今のお気に入りです。
「どうでしょうか…？」
スバルくんのお母さんにも見せます。
くるっと廻ると、ふわりと裾が広がるデザインなのが素敵です。
「よし、それは買っちゃいましょうか。
後、２枚くらい選びましょ？」
うーん。悩ましいです。
すきにーぱんつとやらもあんまり似合わない気がするんです。
おふしょるだーのチュニックを試しに着てみます。
「あ、これ可愛いですっ。」
うーん、スバルくんはどんな服が好きなんでしょうか。
エミリア様のような服…ですか？
「うーん…。」
困っちゃいますね。
スバルくんのお母さんはルンルンしながらお洋服を選んでます。
ふれあスカートも可愛くていいですね。
ビスチェ…え？下着を上に着るってどういう事ですか？
よくわかりません！
お手上げです！困りました！
さっき可愛いと思ったおふしょるだーのチュニックをもう一度手に取ります。
「決めました！これにします！」
自分の直感で選んでみるのも大事…ですよね。
「レムちゃん、それいいわねぇ！合いそうなボトムス探してみるわ!!」

結局、レムのせいでとても時間はかかりましたが、素敵なお洋服を買っていただきました。
スバルくんのお母さんと一緒に買い物袋を持って歩いていたら、スバルくんが来ました。
「あー、遅かったかぁ…。

レムの服選びに付き合いたかったぜ…。」
スバルくんの心底残念そうな顔が可愛くて、くすっと笑います。
「じゃあ、今度でぇとをしましょう！」
スバルくんのお母さんがにやにや笑っています。
スバルくんの顔が赤く染まっていきます。
「レムさん、レムさん…さすがに恥ずかしいわ…お嫁に行けなくなっちゃう…。」
「スバルくんはお嫁さんじゃなくてお婿さんでは？
大丈夫です！レムがいますから！」
はぜろりあじゅうという言葉が聞こえましたが、どういう意味でしょう？
後でスバルくんに聞いてみましょう。
「ほら、いちゃこらしてないで昴は荷物を持つ！
レムちゃんはランチでもして帰りましょうね。」
「俺への扱い酷いよね⁉」
スバルくんが荷物を持ってくれます。
「スバルくん、重かったらレムが持ちますからね。」
「いや、これくらい俺でも持てますし！」
そんな風に話をしながら歩いている事が楽しいです。
「レムちゃんは、甘いものとか大丈夫？」
「はい！大丈夫ですよ。」
パンケーキのお店に行く事になりました。
こちらのパンケーキは甘々のふわふわだそうです。
「お昼からパンケーキ…？」
スバルくんが首をかしげています。
「さてはお母さん、最近の女子が喜ぶお店を探したな！」
「えぇ、そうよ？レムちゃんと一緒に行くためにね。」
え、えっと…。
「レムは、パンケーキ好きですよ？」
甘いシロップと共にいただくパンケーキ…
しかもふわふわなんでしょう⁉

嬉しいです。作り方を覚えたいものです。
「むぅ…今度は俺がレムが好きそうなお店探すもんねー！」
「あらあら、お母さんだってレムちゃんの好みそうなお店…探せるわよ？」
「いんや！俺の方がレムと過ごしてる時間は長いからな！」
もしかしてスバルくんがヤキモチ妬いてます…？
だとしたらとても嬉しい、喜ばしい、歴史の1ページ目ですね！
「スバルくん…レムはスバルくん一筋ですから…。」
「レムは俺とお母さんが選んだ店、どっちに行くんだよ！」
え、えっと…スバルくんのお母さんが選んだお店しか候補にないですよね…。
「パンケーキですかね…。」
スバルくんがショックを受けた顔で立ち尽くしています。
「でもでも…スバルくんと二人の時なら全てスバルくんに選んでもらいたいです…。」
「レム…マジ女神…。」
スバルくんのお母さんがうんざりした顔で言います。
「早くお店に行きましょうか。このバカップル。」
残念ながら恋人じゃないんですよね…。

パンケーキのお店は甘い香りでいっぱいでした。
とりあえずメープルシロップたっぷりパンケーキ5段重ねというものを注文します。
スバルくんとスバルくんのお母さんはからあげだそうです。
パンケーキ屋さんなのにからあげ…？
「あ、マヨネーズたっぷりで！」
なんか凄いです。
運ばれてきたパンケーキはふっわふわで甘い香りがします。
からあげは普通にからあげです。なんだか驚いちゃいますね。
「「いただきます。」」
ナイフとフォークで切り分け、もぐもぐと食べます。

甘くて美味しい…。
シロップも甘いだけじゃなくて、なんというか後味がさらっとしていて…姉様にも食べさせたいです。

「おぉ…食べきった…。」
かなり量がありましたが、食べきる事が出来ました。えへへ。
「レム、口にシロップついてる。」
慌てて拭きます。
「まだ拭けてないぞ。
動かないでくれよー？」
スバルくんが拭いてくれます。
レムはもう幸せです…。
「さてと、家に帰りましょうか。レムちゃん。」
「はいっ！」
スバルくんのお母さんがレムにある物を渡してくれました。

「ふふっ。
お母さんからのプレゼントよ。」
中には可愛らしい花の髪飾りが入っています。
２つです。
「レムちゃんにはお姉さんもいるんでしょ？
だからお姉さんに会えたらお揃いにしてね。」
ピンク色の髪飾りと水色の髪飾り。
「大切にしますね。お母さん！」
「もう、そんなにかしこまらなくていいのよ？」
レムは髪飾りを見ながらにやにやしてしまいます。
帰ったら姉様にプレゼントしなくちゃですね。

「ふぅ…疲れたなぁ…。」

「スバルくん、ありがとうございます。」
あの後も色々なお店でお買い物をして、スバルくんは大荷物だったのです。
少しだけ、治癒魔法を使います。
「みょんみょんみょんみょん…。」
「え？魔法使えるの!?」
「はい。といってもこれが限界ですが。」
疲労感が少し消える程度でしょうけど、スバルくんの役に立てますよね。きっと。
「大気中のマナが薄いので、魔法はあんまり使えないのですけど…でも、スバルくんの為なら頑張ります！」
「よし、今日は勉強中止！レムは休みましょう。
魔法使ったからふらふらしてるじゃないか！」
こらっとおでこを弾かれます。
「うぅ…。」
「魔法禁止！いいね？」
ちょっとくらいダメでしょうかねぇ…。
でも、スバルくんの望みですし…。」
「心の声漏れてるからね!?」

魔法を使わないと約束させられました…
しょぼん。
鉄球さんの事はやっぱり内緒にしなくちゃですね。

「それとも……レムにしますか？」

「スバルくん、おはようございます！」
今日はちゃんと自分のお部屋で寝ました。
起きてすぐにスバルくんの元へ行きます。
「……え？」
そこには着替え中のスバルくんが。
「失礼しました。」
ドアをパタンと閉めたら、ドアの中から悲鳴が聞こえました。

しばらくしたらスバルくんが出てきました。
「もうお婿にいけない…ぐすん…。」
スバルくんの上半身だけしか見てないんですけどね。
そんなにダメだったんでしょうか。
「いざとなったらレムがスバルくんをお婿さんにもらいますから。」
「そんな事をさらりと言えるレムりん素敵…。」
スバルくんと一緒に朝食です。
今日は何をしましょうか。
スバルくんと一緒に何かしたいんですけど…スバルくん的には大丈夫なんでしょうか。
「レム…？どったん？」
「あ、いえ！なんでもありませんよ。」
ここはスバルくんに誘われるまで待ちましょう。
早く誘ってくれますように。
でぇとでも、でぇとでも…あとでぇとでも誘ってくれると嬉しいですね。
でぇと…。

しばらく時間が経ちましたが、お誘いがありません。
それどころかスバルくんは自分のお部屋です。

そろそろお昼です。
「……スバルくん。」
さすがに寂しいです…。
スバルくんの匂いに包まれて生活出来ている事はとても幸せなのに…。
「レムちゃん。一緒にご飯作りましょ？」
スバルくんのお母さんに誘われます。
「はいっ。」

今日のお昼はマヨネーズサンドだそうです。
「レムちゃん、きゅうり切るの上手～！」
とんとんとんと素早くきゅうりを切ります。
塩もみで水気を抜きました。
レタスはちぎって水にさらします。
ハムも切って、マヨネーズをたっぷり塗ったパンにのせていきます。
「こうですか…？」
途中でマヨネーズをたっぷりはさみます。
「はい、完成っ！」
出来立てのマヨネーズサンドにラップをかけて冷蔵庫に仕舞い、スバルくんのお母さんの元に戻ります。
「レムちゃん、スバルにこう言うと喜ぶわよ。」
と言われたので実行しましょう。

さっきはノックをしていなかったからノックします。
「ふぁ…はいはーい、どちらさんっと。」
「す、スバルくん、お昼ご飯にしますか？お風呂にしますか？それとも……レムにしますか？」
無言でドアを閉められました。

ドア越しに聞かれます。
「そ、それ誰に習った!?」
「スバルくんのお母さんですけど…?」
というか開けて欲しいです。
スバルくんの顔を見てお話したいですよ。
ドアを開けると、真っ赤な顔のスバルくんがいました。
「ちなみにご飯とお風呂はわかるんですが、レムを選ぶとどうなるんですか?」
「さ、さぁな!うん!」
スバルくんがお母さんの元へ行きます。ぎゃんぎゃん怒っています。スバルくんのお母さんは「(ノ≧?・≦)てへぺろ 」とだけ言ってました。
てへぺろとはどういう意味なんでしょうね。
スバルくんが戻ってきました。
「レムを選ぶとその日1日…えっと、幸せになれるんだ。うん。」
体よく誤魔化された感じが凄いですよ。姉様。
「そうだ、お昼食べたらカタカナの勉強するか?」
「はいっ……でぇとじゃないんですね(小声」
スバルくんと一緒にお勉強も楽しいですけど、でぇとじゃないのが少し残念です。
スバルくんと一緒に先程のマヨネーズサンドを食べます。
少々マヨネーズがしつこいのではないかと思いましたが、そんな事なく普通に美味しいです…。
ちなみにスバルくんのお家の冷蔵庫はマヨネーズが沢山常備されています。
マヨネーズが1本でもなくなるとすぐに補充するんですって。凄いです。
食べ終わったらお皿を洗っておきます。
その後、スバルくんのお部屋に行きました。
「スバルくん。お待たせしました。」
「んじゃお勉強を始めますかね。」

前回のノートにア、イ、ウ、エ、オ、とスバルくんが文字を書いていきます。
その横にあ、い、う、え、おと書きます。
「レムはもうひらがな読めるんだよな。上達が凄いというか…なんというか…。」
「この世界の言語は単純でシンプルでしたから。もっと褒めてください！」
スバルくんが頭を撫でてくれます…えへへ…幸せです。
カ、キ、ク、ケ、コ…。
サ、シ、ス…スバルくんの文字ですね。えへへ…。

少し時間がかかりましたが（途中レムがスバルくんの文字を教えてとねだったからです。）、スバルくん特製カタカナ表が完成しました。
「スバルくんスバルくん♪」
作って貰ったカタカナ表をスバルくんが飲み物を取りに行っている間抱き締めます。
スバルくんの匂いがする…。えへへ…。
スバルくんの匂いを嗅ぐのはレムの特権ですねっ。
そう…レムのとっ…け…ん…。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
ふぅ…。ヤバい。かなりヤバい。
レムさん可愛すぎだろ。
しかもいつもよりなんか近いし。いい香りするし。
お昼なんて「それとも……レムにしますか？」とか完全に俺を試してるだろ、お母さん！
カタカナ表書いてたらいきなり
「スバルくん！先にスバルくんの名前をカタカナで覚えたいです！」
とか言われるし。

完全に試されているよな…。
よし、飲み物を取って部屋に戻ろう。
レムが待ってるしな。
とりあえず緑茶でいいか。
２つ分のコップに緑茶を注いで、部屋に戻る。

「嘘だろ……。」

レムが、ノート抱き締めながら寝ています。
やはり昨日のマナ使用による疲れが残ってるんだろうなぁ。
落ち着け…落ち着けナツキスバル。
レムをお姫様抱っこしてベッドに運んで、俺はゲームをする事にした。
ドラクエ１１、早くクリアしたかったんだよね。うん。
「スバルくん……ずっとレムがお側にいますから……。例え…エミリアさま…を選んだとしても…」
畜生。ゲームに集中出来ない…。
レムが起きるまでレムの寝言に悩まされました。

＊＊＊＊＊＊＊
スバルくんの匂いを堪能してたら寝てしまいました…。
スバルくんが”お姫様抱っこ”でベッドまで運んでくれたそうです。
鬼幸せすぎます…。

「さて、お勉強も終わってお昼寝もした！
そしてまだ２時３０分！お日様も笑ってる！
よって今からゲーセンに行こう！」

途中よくわかりませんでしたが、やっとスバルくんからのでぇとの

お誘いですね。やった、やりましたよ！

しかし…

「げーせんとはなんですか？」

「おお…。凄いです！スバルくん！」

スバルくんとでぇとです！
もう一度言いましょう。
スバルくんとでぇとです！
……幸せです。
レムはいま、世界で一番幸せな女の子です。
だって、スバルくんと手をつないで歩いているんです！
スバルくんのお母さんに買ってもらった白いワンピースを着て、スバルくんと一緒にげーせんに行くんです。
スバルくんの説明によると遊技施設なんですって。
レムにとっては未知の場所ですから、なんだかわくわくしちゃいます。
今歩いている町はなんだか穏やかで、色々な音楽が流れています。
「～♪」
「その曲、気にいったの？」
いけません。ついハミングを…。
「気にいったというより、覚えたというか…。」
「まぁ、どこもかしこも流行りの曲めっちゃ流すからなぁ。」
スバルくんがにこっと笑い、
「んじゃ、俺の渾身のおすすめソング集でもあとで聞こうか！」
「はいっ。」

スバルくんと他愛もない話をしながら歩いています。
姉様のとても美味しいふかし芋に何をつけたらもっと美味しいかとか、エミリア様の髪型の話とか、ベアトリス様とパック様の仲の良さとか。

「お、着いた。」
「ここですか？」
扉が開く度に色々な音が重なりあったいわゆる騒音が聞こえます。
それになんだか……。
「煙臭いです……。」
スバルくんの魔女臭よりキツいかもしれません……。
色々な機械が動いてます。
なんか、がしゃんっとふわっふわな猫のくっしょんを掴む遊びをしています。
あ、げぇむってゲームって書くんですね。覚えました。
スバルくんがお財布から銀貨（１００円の事）を沢山取りだします。
「レムさんや、基本はこれを入れる事でゲームが遊べるんだぜ。」
「おぉっ。」
近くで女の人が太鼓を叩いています。
腕が痛いと言いながらめちゃくちゃ殴ってます。叩いてるんじゃなくて殴ってますよ。
「スバルくん、あれはなんですか？」
「音ゲーにまず興味持ちましたか…。リズムにあわせて太鼓を叩くゲームだぜ。」

『せーせきはっぴょーっ
失敗だドン……。』
女の人が「うーーーーっ」と言いながら棒を投げ捨てました。
そのまま、「やっぱりこんなの嫌いじゃぁっ。」と言いながら別のゲームの方へ行きます。
「レムもやる？」
「やりますっ。スバルくん、教えてください！」
「おう！」
投げ捨てられた棒を拾って、銀貨を投入します。
ドンちゃんとカツちゃんというキャラクターが可愛いですね。
「曲を選ぶドンっ」

スバルくんにお任せします。
スバルくんが選んだ曲は先程レムがハミングしていた曲でした。
「いきなり知らない曲やっても難しいからさ。」
「スバルくんはほんっとうに鬼がかってますね！」
「だろ？」
こうやってレムを気遣ってくれるスバルくんが大好きです。

『けっかはっぴょーっ
上手に演奏出来たドン！
失敗だドン…。』
やった！スバルくんに勝ちました！
ですが…一番簡単を選んだレムと一番難しいを選んだスバルくんでは全く勝負になりませんね…。
「うわぁ…。久しぶりすぎて負けた…。」
「スバルくんスバルくんっ！レムはやりましたよ！」
ゲームで使った棒をしっかり直してから別の場所へ行きます。
「次は何がいいかな～。」
「レムはスバルくんとでぇと出来るならそれだけで幸せです。」
「真剣な顔で言われるときゅんってしちゃう！」
「ときめいた後にレムに求婚してくれてもいいんですよ？」
スバルくんとくれーんゲームのコーナーまで行きます。
そう。先程の猫のくっしょんです。
「おっけーい、あの猫を取ればいいんだな？」
「はいっ。猫さんを救ってください。」
銀貨を5枚ほど入れてゲームを始めます。
ボタンで細かく位置を調節しながら、くっしょんを掴みます。

落ちました。
また調節しながら掴みます。
落ちました。

調節しながら掴めませんでした。
掴みます。落ちました。
掴みましたがまた落ちました。

「これが最後の一回……。」
ごくっと唾液を飲み込む音が聞こえます。
細かく位置を調節します。
汗がポタリと落ちました。

「いっけえええええええっ。」

掴めませんでした。
スバルくんが銀貨を一枚だけ入れます。
「集中しろ…ナツキスバル…。心頭滅却…。」
細かく調節しながら、動かしていきます。
ボタンを触る手もどこか震えています。
「ここだぁっ！」
がっしりとくっしょんを掴んで…

「おぉ…。凄いです！スバルくん！」
取れました!!
猫のくっしょんです。可愛いです。
もふもふです。目付きの悪さがスバルくんそっくりです。
よし、この子をバルスくんと名付けましょう。
さっきの女の人がぬいぐるみを取ろうとして、ボタンを叩いてますよ!?壊れませんか!?
「うっわぁ…姉さん荒れてるなぁ…。」
「お知り合いなんですか？」
「うん。ゲーセン仲間。喋った事はあまりない！」

お知り合いの女の人ですか…。
「あ、あれ？レムさーん？」
「はい。スバルくんのレムですよ？」
にっこぉっと笑ってスバルくんを見つめていたら、ちょっとだけ怯えられました…。
「どいつもこいつもリア充かよっ。おいスバ公！てめぇ面出せ。」
女の人がスバルくんにちょっかいをかけています。
「はいよっと、どれ取ればいいんすか？」
「あ、えっとね～、あのフィギュアが欲しいんだぁ♪」
……見過ごせない状況ですね。
大変見過ごせないです。ええ、許せません。
「エミリア様に絶対言い付けてやる……。」
「レムりん怒んないで!?」
なんですか、なんでぽっと出の女性にスバルくんとのでぇとを邪魔されないといけないんですか！
きっと名前すら出てきませんよ!?
「ほいよっと、取ったけど…。」
「おぉっ。ありがとうな、スバ公。みらのちゃん大喜びだよ大歓喜の歌だよ。」
名前出ちゃいましたよ……。
「んじゃ、姉さんさよならっす。」
「彼女ちゃん、スバ公をよろしくね？
スバ公、彼女ちゃん寄越せ。」
あ、あれ？スバルくん目当てじゃないんですか？
なんだかほっとしました。
「レム、ごめんな？姉さん、可愛い女の子の嫉妬する姿が大好きなんだよ……。」
「最低です。これはもうレムを甘やかさないとダメです。よって……もっとスバルくんはレムを見てなきゃダメですよ？」
不意打ちでほっぺたにキスをしてみました。
スバルくんは真っ赤な顔で、「れ、れ、れむぅ!?」と言ってます。

「レムからのお礼と少し嫉妬した気持ちですよ？」
いたずらっぽく笑ってみてから、スバルくんと手を繋ぎます。
「それじゃ、次は何をしましょうか！」

「……今はレムだけを見ててくださいよ。」

「スーバルくん♪」

レムがゲーセンの中を動き回って、目につくものに興味を示している。なにこれ。レムりんマジレムりんだわ。

さっきは姉さんに絡まれたせいでレムが嫉妬してくれた。嫉妬レムでも可愛かった…。

俺、いつからラブコメの主人公にジョブチェンジしたんだろう。

「スバルくん?どうかしましたか?」

首を可愛らしくかしげる姿も可愛いですね。

こんな娘に愛されてる俺って幸せ者なんじゃやね?

いやいやっ。待て。初心を思い出せスバル…。

俺はエミリアたんという想い人がいる。

「スバルくんの馬鹿…。」

「あーっ、ごめんレム。拗ねないで!?」

エミリアたん……今、何をしているんだろうか。

「絶対エミリア様の事ばっかり考えてたんですよね。

……今はレムを見ててくださいよ。」

むぅっと唇を尖らせるの可愛いなおい。

「レムは可愛いなぁ。」

「ひゃうっ!?い、いきなりそんな事を言われると……て、照れます。」

顔が蕩けそうなくらいに笑顔のレムに正直、心が揺らいでいる。

****

「レースゲームも楽しかったですっ。」

ゲーセンで沢山遊んで、今から帰るところです。

「おー。ならよかったぜ。」

スバルくんと並んで歩きます。

行きと違うのは大量のぬいぐるみ。
クレーンゲームで沢山取ってくれたんです。
さすがはスバルくん。かっこよかったです。
「れ、レムさん…思春期の男の子的にそんな見つめられると照れちゃう…。」
「それはすみませんでした。
でも、スバルくんがかっこよかったなって思ってただけですよ？」
「なんでもないかのようにさらりと言うレムりん素敵！」
スバルくんの顔が茹でだこのようです。
そ、そんなに恥ずかしい事を言っちゃいましたかね…。
なんだか顔が熱くなってしまいます…。

しばらくお互いに何も話せませんでした。
沈黙が続いてしまうのも嫌だったんで、話し掛けようと思ったんです。

「あの…っ」「あのさっ」
「スバルくんからどうぞ。」
「いや、レムからどぞ。」

また沈黙が続きます。

じれったいので深呼吸をして、高まる鼓動を抑えながら言います。
「今日も楽しかったです。また、でぇとしましょうねっ。」

きっとレムはズルい子です。
ズルい子なんです。

今、この瞬間がずっと続けばいいだなんて思っていますから。

スバルくんと過ごす時間が永遠に続けばいいのに…だなんて思っているんですから。
願わくば、スバルくんがエミリア様じゃなくてレムを選んでくれたら本当は嬉しいのになんて思ってますから。
二人で逃げようって言ってくれて、嬉しかったんですよ？
あの時はこんな事になるなんて思っていませんでしたけれど。

スバルくん。

大好きです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「エミリア様。
スバルとレムって誰かしら？」
「え…？」
ラムは何を言ってるの？
レムは貴女の妹じゃない。
スバルは……。

「エミリア様、きっと疲れているんだわ。
どうか自室で休んで頂戴。」
「違うっ。

スバルとレムは……スバルとレムは……っ。」

あれ？誰だったっけ？

「…ベティーを置いて行かないで欲しかったかしら。」

「エミリア様？王戦の方はどうしたの？」
ラムがそう尋ねてくる。
あれ？そういえばなんで私は…？
「何かすごーく大切な事があったような気がするんだけど…。
ド忘れしちゃったみたい…。」
「忘れるような用事は後々思い出すと、別にどうでもよかったりするわ。きっとエミリア様のもそうよ。」
ラムが髪の毛を整えてくれる。
「エミリア様、あんまりにも乱れていたから整えておいたわ。」
「ありがとう！すごーく助かるわ。」

こんな私達の横をベアトリスが通り過ぎていく。

少し通り過ぎて行ったところで戻ってくる。
「…妹の方とあのムカつく男はどこなのかしら？」
妹？ムカつく男？
ベアトリスの顔は酷く怯えているようにも見えるけど…。
「そこの桃髪メイドの妹とベティーの扉渡りを易々と破ってくるスバルの事かしら！」
ラムの妹？

「ラムに妹なんていないわよ。」
私の思った事をラムが言う。
「なんで…かしら…。なんで…。
にーちゃ！にーちゃは!?」

パックは、困ったような顔で

「ベティー？もしかして、疲れているのかい、」

と言う。
ベアトリスは今にも泣き出しそうな顔で
「どうして…どうしてなのかしら…。
お前達のすぐ側にいたのよ…ずっと側にいたのに…どうして忘れてしまうのかしらッ！
ベティーは…ベティーはッ…
こんな事なら…ベティーを置いていかないで欲しかったかしら。
スバルに…扉から連れ出して欲しかったかしら。
スバルがその人じゃなくても…ベティーは…ベティーは…。」

そこまで言うと、ベアトリスは禁書庫に閉じこもってしまった。
正直、さっぱりわからない。
だけど、嘘を吐いている顔じゃなかった。
とてもすごーく、苦しそうで…哀しそうで…。
私達は何を忘れてしまったのだろう。
「…エミリア様、顔色が悪いわ。
少し休まれてはどうかしら。」
「ありがとうね、ラム。
私は大丈夫。元気モリモリよ。」
「そう…。」
こんな時、あの人なら「元気モリモリなんてきょうび聞かねえな!?」なんて言ってくれるのになぁ…。
あれ？

＊＊＊＊＊

「スバルくん、スバルくん！
見てください、すっごく可愛い猫です！」

でぇとからの帰り道、灰色の猫を見ました。
どことなくパック様に似ています。
「パックにそっくりだな。」
「にゃぁ？」
灰色の猫は背伸びして、のんびりと歩き出します。
「にゃぁ…」
その鳴き声はどこか別れを告げるような…そんな哀しい鳴き声でした。

「レム、今日は…その、楽しかったか？」
「はい！スバルくんと一緒でしたから！」
スバルくんと一緒だったらきっと、なんでも楽しいでしょう。
あぁ！こんな時に抱きつけるような子だったら…！
いえ、そんな事はしちゃいけないですよね。

ふと思い至り、スバルくんの袖を引いてみます。
「おうちに戻ったら一緒に本が読みたいです…いいですか？」
「それくらいなら全然平気！だぜ？」
スバルくんのおうちまでもう…少し。
あと少し…。
まだ帰りたくないなぁ…。

「スバルくん。レムはスバルくんを愛してますよ。」

「…スバルくんは鈍感すぎます。」

「ん？なんか言ったか？」

レムの言葉はスバル君には届かないまま、かき消されました。

でもいいんです。

レムは、それでもスバル君の傍にいられるだけで幸せなんです。

だから笑って、別の言葉を唇から紡ぎだします。

「レムは、スバル君とこうやって歩いているだけで幸せですって言ったんですよ。」

今の顔は強張っていないでしょうか。

変に歪んでないでしょうか。

「ありがとな。俺もすっげぇ幸せ！鬼幸せ！」

スバル君のその一言で元気が出ます。

そうです。これでいいんです。

本当は全然よくないですけど。

「…スバル君は鈍感すぎます。」

聞こえないようにぼそっと呟いて、スバル君と手を繋ぎます。

「スバル君はお酷いお方です。レムがいくら勇気を出してもスバル君はそれに気づいてくれませんね。」

「え？」

いけない・・・。つい本音が出てしまいました。

「いえ、なんでもないです。さ、早く帰りましょう？」

本当はまだ帰りたくないです。

まだこうして・・・

「あっれ～、レムちゃん偶然だねぇ～」

楽しい時間とは呆気なく終わるものですね・・・。

「さ！私と二人で夕飯のお買い物しましょ!!」

「いやいや!?俺もいるからね!?」

でも、にぎやかでこれはこれで好きです。

夕食はカレーライスでした。
サラダにマヨネーズをたっぷりかけて、カレーにもかけるだなんてかなりびっくりです。
マヨネーズとは本当に万能な調味料なのですね。
「スバルくんスバルくん、本が読みたいです！」
スバルくんのお部屋には色々な本があって、きっとベアトリス様も知らない本もあるんじゃないかと思えてきちゃいます。
ベアトリス様、本がとてもお好きですからね。
でも、きっと一緒にスバルくんの本を読みましょうなんて言ったらこう言って断られちゃうでしょう。
『誰がそのムカつく男の本なんて読むかしら！ベティーはベティーの好きな本を好きなように読むかしら！』
でも、どんな本があるのかやっぱり気になっちゃってるのはバレバレでパック様に見てきたら？と言われちゃうんです。
『別にその顔を見るのも腹立たしい男の本を読もうなんて思ってないのよ…。でも、にーちゃが見てきたらどうだい？って言ったから仕方なく来たかしら。
お前の腑抜けた顔なんて見たくないからさっさと出て行くかしら!!!!!』
きっと、スバルくんが出た後に、ふにゃあっと蕩けた顔で本を読み始めるところまで想像する事が出来ました。
ベアトリス様はそういうお人だと、レムは思っています。

スバルくんから絵本を借りて読んでいます。
厳しく育てられたお姫様が色んな困難を乗り越えて王子様と出会いますが、王子様はお城の牢に監禁されている、いわゆる囚われの身でした。

王子様はとても辛い思いをしていて、お姫様はなんとしてでも救わなくてはと奮起します。
お姫様は大好きな王子様を守る為に動物も建物も人間も何もかもを倒して、最終的には世界にはお姫様と王子様しか残らないという物語でした。
うーん…でも、ちょっと納得がいかない物語です。
本当にそれで2人は幸せになれるのでしょうか。
レムならば、王子様がお城から抜け出せるようお手伝いをしますが…全てを倒してハッピーエンドなんてダメです。
そんなの本当の幸せなんかじゃありません…。
「でも、全て壊して潰してスバルくんと2人きりと言うのは捨てがたい…」
「その絵本を読んで何を考えているかは手を取るようにわかるけど思考がほんのりヤンデレ路線に移行してる気がしますよ!?」
スバルくんは、この絵本を読んでどんな事を思ったのか知りたかったようです。
ですが、レムにはもっと読みたい本がありました。

「泣いた赤鬼が読みたいのか?」
「ずっと、気になっていたんです。」
読んで泣きました。
なんですか、青鬼さん報われなさすぎます。
赤鬼の為に悪者になって、赤鬼宛に別れを告げる立て札を立てて、去って行くなんて本当に悲しすぎます。
レムにはそんなかっこいい事できません…。
「これは姉様にもエミリア様にもお伝えしなくてはならない話です。鬼族として語り継ぎます…っ!」
「そんな大袈裟すぎやしないかな?!!!」
「この青鬼は鬼族の誇りなんです!!!!その絵本、レムにください!」
「嫌がるかな、と思ったんだけどなぁ…」

スバルくんは少し驚きながらも、泣いた赤鬼をレムにくれました。
スバルくんの香りがします。
なんだか幸せな気持ちになりますね。